

日向国延岡藩内藤充真院著 「五十三次ねむりの合の手」

―陸路を行く 現代語訳・解説 (三)―

神崎 直美

はじめに

本稿は当紀要で連載している日向国延岡藩内藤家の藩主夫人であった充真院の手による紀行文「五十三次ねむりの合の手」の現代語訳・解説の三回目である<sup>(1)</sup>。今回対象とした箇所は、文久三年(一八六三)四月十四日の前号の続きの記述から同月十八日までである。この期間は初の転居の旅をはじめて九日目から十三日目である。地域としては遠江国の金谷(現在の静岡県島田市)から三河国(現在の愛知県の東半分)を経て尾張国の宮(現在の愛知県名古屋市)に到着したところまでである。

四月十四日に掛川に到着して当地の領主であり、かつ内藤家の親戚である大名太田家から手厚い挨拶と待遇を受けるが、この箇所についてはかつて拙稿「日向国延岡藩内藤充真院著「五十三次ねむりの合の手」小考」にて現代語訳と解説を紹介したことがあるので<sup>(2)</sup>、本稿では割愛する。一方、十五日のうち見付・浜松間と十七日の岡崎の西本陣に関しては、かつて伊能秀明・小倉葉子・永田由香利・桑原理恵氏による現代語訳があるが、補足したい部分があるので、改めて現代語訳と解説を作製してここに掲載した<sup>(3)</sup>。

今回扱った箇所のうち、三河国は内藤家にとって先祖所縁の特別な地である。旅の日々で東海道の名物を味わったり、

宿の子供らとの微笑ましい出会いに心を和ませたり、若干ながら寺院参詣をしたりと旅ならではの体験をしつつも、長旅の疲れのためか駕籠の中で居眠りをした様子が度々窺われる。

## 一 遠江国に行く

### ① 四月十四日・続き (九日目) 名物飴の餅を味わう

**原文** 金谷宿小休、河鳶八郎左衛門、夫よりさよの中山にかかり、あめの餅名物の由乍、かねてきたなき事聞しままたへす、あめ計取て行過し見し所、咄しには似す、随分よろしうに見へ候、此節せき出る故、幸とかこに入持行、小泉やと云、日坂小休、山鼻村小休、段々行七ツ半比松原を行、向ふに入日おかまれ、掛川近くにもならんと思つつ、此辺旅人一人もとをらす、かへつて心安しと思つつ行に、大樹の下にあやしけなる小家有ゆへにほうすなと思へる所、又松原にかかれは、掛川迄はもはや近く成候哉と尋しかは、一里もあらんと聞、段々人貌も見へすちやうちんもなく、月をあかりに行、はれし日なかれよけれ、雨夜ならはさそと思ひつつ、又少し百姓家有、家の中にてあやしけなる声にて何かうたふを聞尋ければ、麦つき歌の由、日のうちは田に出、夜なへ仕事に致よしめつらしく、

**現代語訳** 金谷では本陣を営む河鳶八郎左衛門家で小休憩をとった。金谷を過ぎた後に小夜の中山まで来た。この地の名物は水飴を餅でくるんだ飴の餅であるが、以前から飴の餅は不潔であると聞いており食べる機会もなかった。ここでは茶屋で休憩せずに、販売している飴の餅と飴―水飴―のうち水飴だけを購入してみた。以前話に聞いていたような不潔な品ではなく、十分良い品に見えた。最近、私は咳が出ていたので、咽を潤すのに水飴はちょうど良いと思い私の駕籠に持ちこんだ。この水飴は小泉屋が販売している品である。

日坂で小休憩し、さらに間の宿の山鼻村でも小休憩をとった。さらに進み七つ半―午後五時―頃に松原を通行してい

ると、向こうに太陽が沈む様子が見えたので拜んだ。このあたりは掛川の近くであろうと思いつながら街道の様子を見ると、旅人が一人も歩いていない。かえつて気楽で良いと思いつながら進むと、大きな木の下にみすぼらしい小さい家があり、祠だろうかと思つてみると、また松原にさしかかった。「もう掛川の近くまで来たのではないですか」と御付の者に尋ねたところ、掛川までは一里―四km―もあるという。次第に人の顔が判別できない程暗くなつたが、提灯を灯さずに月の光を灯りとして進んだ。晴れた日だから良いが、雨の夜ならば暗くて困るだろうと思いつながらまた少し行くと百姓の家があつた。家の中から不思議な声で何か歌つているのが聞こえてきた。御付の者に何を歌つているのか尋ねたところ、麦搗歌であるという。農民が日中は田で作業をして、さらに夜なべ仕事をしているのを、私は珍しく思つた。

**解説** 充真院は金谷で休憩した本陣を河嶋八郎左衛門と記したが、正しくは河村八郎左衛門である<sup>(4)</sup>。小夜の中山は道の左右を山に挟まれたたいへん狭い峡谷で東海道の難所として知られるが<sup>(5)</sup>、その特徴ある地形について充真院は全くふれていない。さらに、小夜の中山は蛇身鳥退治や夜鳴石物語をはじめ数々の伝説が著名であるが<sup>(6)</sup>、充真院は伝説そのものについても特記していない。一方、当地の名物である飴の餅と水飴については関心を寄せている。この水飴は別名を子育て飴と言う。当地の伝説の一つである山賊に殺された妊婦から生まれた赤子を育てるのに舐めさせた水飴のことである。麦芽を原料とした水飴であり、この水飴を餅の中に包んだものが飴の餅である<sup>(7)</sup>。充真院は飴の餅について、以前、不衛生な品と聞いていたが、当地で現物を見て衛星面で問題無いと判断し、御付の者に伝えて水飴の方を購入させ、駕籠の中で舐めながら道中を進めたのである。先入観に囚われず、自分の目で見て判断する点は充真院らしい。なお、水飴を購入した小泉屋とは茶屋の小泉屋忠左衛門のことである<sup>(8)</sup>。

充真院は松原を進みながら日の入りに遭遇した。充真院は日没の太陽を見てありがたく思い拜んでいる。さらに、農民が暗くなつても自宅内で農作業である麦搗きをしていることを充真院は知つた。麦搗きとは刈り取つた麦を臼に入れ

て杵で搗くことで、この作業の際に歌うのが麦搗歌である。農民が夜まで仕事に励んでいる様子を珍しく感じたのは、農村生活の実態を目の当たりにする機会がこれまでなかった上流階級の一員である充真院ゆえである。

② 四月十五日 (十日目) 密かに枇杷酒を飲む

原文 十五日、天気、此辺五月前ゆへか、たこ早朝より上げてうなりの音四・五日聞、太田様え昨日の御挨拶に市右衛門出て、御隠居様え持参致候ままとて、古金らんふくさ上る、掛川を六ツ半時立候時も、きのふ通先払して見送りに役人衆出る、原川といふ所小休、袋井小休、見附昼休、本陣神谷三郎右衛門、又々歩行せよとすすめら(れ)しか、例の通先かこにてゆかん、御酒を用意し少々枇杷を持行、男供には知らさるやうにして、あまりあまり人の草臥しやうす故、木之根に腰かけ少し野立せんといへるゆへ、幸と枇杷御酒を出させ一口のめといへは悦て、思ひよらぬ所故、おくれし物とかわるかわる引うけのみしを見るに、女水こ傳之内に有、山中にて三世姫とらるる所にて、とく酒をのみし所の様子によく似て思ひ出られ、その絵くみによく似よりおかしう、其うちにおくれし人々も来りて、追々日もかたふきし、いさや行んとけふも泊りおくれはと思ひ、いそぎいそぎて浜松へ着、本陣の名梅谷市左衛門、

現代語訳 十五日の天気は晴れである。この付近は五月以前だからであろうか、朝早くから凧揚げをしており、凧がうなるような音を響き渡らせている。ここ四、五日、凧が発する音を耳にしている。掛川の領主である大名の太田氏から昨日、丁寧に対応していただいたので、市右衛門―大泉市右衛門明影―が挨拶のために掛川城へ出かけた。その際に御隠居様―太田資始―に宛てて御礼として古金襴製の袱紗を謹呈した。掛川の本陣を六つ半―午前七時―に出発する時にも、昨日と同じように掛川の家の中の者が先払いをしてくれたうえ、役人らが見送りにやって来た。その後、原川と袋井で小休憩をとり、見附の本陣神谷三郎右衛門家で昼休みにした。

見附を出発してから、私はまた御付の者に駕籠から出て歩くよう勧められたが、これまでと同じく駕籠に乗って進んだ。お酒に少量の枇杷の葉を浸したものを駕籠の中に持ち込んだことは、駕籠の側にいる男性の御供たちに知られないようにした。「皆がたいへん疲れた様子なので木陰で野点をしまししょう」と御付の者から提案された。ちょうど良かったと思ひ野点をすることにした。そして、密かに用意した枇杷酒を駕籠から出させて、「一口お飲みなさい」と女中たちに声をかけたら喜んだ。予定外の戸外での休憩なので、女中たちはあわてて枇杷酒が入った容器を廻し飲みしている。その姿を見ていたら、かつて読んだ『女水滸伝』に山の中で三世姫が捕らえられた際にあわてて酒を飲んだ様子によく似ていると思ひ出した。さらに、その場面を描いた挿絵に今の私たちの様子がよく似ていることを愉快に感じた。そのうちに私たちから遅れていた人たちがようやく追いついた。次第に夕日が沈みはじめた。早く出発しないと今日も宿泊する本陣に到着するのが遅れてはいけないと思ひ、大急ぎで進み浜松に到着した。浜松で私が宿泊した本陣は梅谷市左衛門である。

**解説** 遠江国は風が強く凧揚げが盛んである。歌川広重の錦絵「東海道五拾三次」（保永堂版）の「掛川 秋葉山遠望」に空高くあがった凧と手から離れて飛んでしまった凧が描かれている。凧揚げは当地の風俗として著名であった（9）。ちなみに、掛川では戦前頃まで四月から五月にかけて大人も子供も凧揚げを楽しんでいたという（10）。充真院はうなるような音が特徴の当地の凧を見た。既に駿河国でも凧の音を耳にしていたという。音は凧にとりつけた「うなり」から発せられる。

掛川藩太田家（譜代・五万石）に挨拶に赴いたのは、旅の責任者である松井茂兵衛一元ではなく、井伊家中であり充真院の御里付重役の大泉市右衛門明影だった（11）。昨晚、掛川に到着した折に太田家から厚遇を受けたので、充真院は手持ちの品の中から逸品である古金襴の袱紗を選んで贈り、御礼の気持ちを表したのである。古金襴とは古渡り金襴、

すなわち色系に金糸や銀糸、金箔、銀箔を用いて文様が浮き出るようにした煌びやかな織物のうち、中国から伝来した由緒ある品である。したがって謝意を伝えるのに相応しい品である。当時の藩主太田資美は、その兄である先代資功の早すぎる死去により藩主に就任して一年目で、わずか九歳の少年藩主である。資美の父は隠居の資始であり、かつては幕府の老中を勤めた人物である<sup>(12)</sup>。太田家による充真院への厚遇は資始の計らいによるものと見定めて、隠居に宛てた返礼をしたのである。なお、太田家は出発時にもわざわざ先払いする者や役人らを派遣してくれ、充真院一行に礼を尽くしてくれた。

ところで、前述したようになって別稿にて太田家による掛川での厚遇について紹介したことがあるため、一連の箇所を本稿では割愛した。そのため、本陣に関する原文も本稿では掲載していないが、十四日の末尾に充真院が「掛川本陣澤野弥三左衛門」と記していたことをここに補足し、当地の本陣、及び澤野弥三左衛門家について少し説明しておきたい。掛川の本陣は澤野弥三左衛門家と村松惣左衛門家の二軒、脇本陣は一軒で林喜左衛門家である。澤野家の敷地は二〇〇坪、村松家は一〇〇坪で、澤野家の敷地は格段に広く一番規模の大きい本陣である。充真院が宿泊した澤野家は掛川城のすぐ南で大手門に近い連雀町にあった<sup>(13)</sup>。澤野家の本陣は見取図も存在するので、充真院が招かれた部屋―八畳の上段間―も確認できるのである<sup>(14)</sup>。

見附には神谷三郎右衛門と鈴木孫兵衛の二軒の本陣があり、充真院は神谷三郎右衛門家で昼休みにした<sup>(15)</sup>。見附を出発してから、途中で御付の者が戸外で休憩することを勧める際に皆が疲れたことを理由にあげている。連日の旅で疲労がこたえて遅れた者たちを待たための時間調整でもあった。充真院は密かに用意した枇杷酒を男性らには知られないように女中らに廻し飲みをさせながら、『女水滸伝』の一場面を思い出し、自分たちも同じ行為をしたことを面白く感じている<sup>(16)</sup>。前号でふれたように充真院は沼津で『東海道中膝栗毛』、そしてこの見附から浜松に向かう途中では『女水

漕伝』に思いをはせた。教養豊かな充真院の読書体験が、辛く疲れる長旅をつかの間とはいえ楽しい時間に変えている。

浜松で充真院が宿泊した本陣は伝馬町にある梅谷市左衛門家で、浜松に六軒ある本陣の中で敷地の規模は四番目であった(17)。

### ③ 四月十六日 (十一日目) 混雑する浜松の本陣

**原本** 此宿は諸家様の奥方私共入四軒にて、殊之外こんさつ故、定めし明朝は何方にても渡りいそぎ早かるへし、少しにてもおくれし時は、夫たけおくれ不都合に成、御閑所も有故、指つかへなきうちとて一番に荒井の渡し舟に乗やうにと表方よりいわれしまま、朝七ツに支度し立出る比に、向成外様にては一番ふれの様子、門前こたこたとし此方早しと悦、前番成ものは小休の宿をおこし、しらめる時分に入しとの事、私はちやうちんにて出、月も殊之外はれ、稀にこにた馬杯とをる、初の小休篠はらと云、私は月を供とし行故、昼よりもよしとおもふ、あたりも静ゆへ、供の咄し声も聞て淋しくもなく、しらめ渡時小休に着、やうやう人貌よく見わかり候、小出様落合か、ここにてはなれしならんといひつつ、舞坂・天龍の舟渡しも過て、爰の気しきよきうろん故書す、

**現代語訳** 浜松の宿場は、他の大名家の奥方の一行も宿泊していた。私たちを含めて四家もいたため、たいへん混雑していた。表方から「必ず明日の朝はどの家も急いで川越えをするであろうから、早い時間から出発を急ぐに違いありません。少しでも出発が遅れると、その分、予定が遅れて困ることになります。しかも、閑所も通るので差し支え無いうちに出発するのが良いので、私たちは一番に新井―新居―に着くために渡し舟に乗るようにします」と予定を伝えられた。その言葉に従い、朝七時―午前五時―に準備を済ませて出発する頃には、他家の奥方の一行は本日一番目の指しを告げている所で、本陣の門前はごたごたと混雑していた。私たちの方が早く出発する用意が整ったことを喜んだ。

私たち一行のうち先行する役目の者は、この先で小休憩をする間の宿に宿を開けてもらおうよう交渉に出かけた。空が白み始める頃には小休憩のための宿に到着する予定であるという。私が出発する時はまだ暗いので提灯を灯して進んだ。まだ月が残っている空は晴れており、街道は時折、荷物を運ぶ馬が通行している。初めの小休憩は篠原である。私は朝早く名残の月を旅の供として進むのは、昼に通行するよりも風情があり良いと思う。周りも静かだが、御供の者たちの話し声が聞こえるので寂しさを感じない。夜が明けた頃に篠原に着いた。ようやく、人の顔が見えるまでに明るくなった。小出様に途中で出会ったがここで失礼しなければならぬと言っているうちに、舞坂と天竜川の渡しを渡船で通過した。これらの景色が良かったかどうかは私の記憶と備忘録が不確実なので、筆を止める。

**解説** 当時の旅は日の出と供に出発し、日暮れには宿に到着するのが常道である。予定通りに行程を進めるにあたり出発時間が肝心である。充真院一行もこの点を心得ていたことが窺われる。ところで、充真院が浜松に宿泊した際に、四家もの大名の奥方が宿泊していたという。この時節ならではの状況といえよう。さらに、幕府が大名の奥方らに領地への転居を命じたのはこの旅の一年前であったが、充真院は江戸から離れがたく転居を引き延ばしていた。同様の大名夫人が充真院以外にも存在したことが、浜松の宿の様子からわかる。他の三家はどこの大名家だったのかも気になるところである。

充真院一行は予定通り素早く浜松の宿場を出発することができた。まだ夜明け前で空には月が残っており、名残の月の下を進むことに風情を感じているのは感受性豊かな充真院らしい。周囲は暗く静まりかえっているが、それ故によく聞こえてくる御供の声に充真院は耳を傾け、安堵している様子である。浜松の宿を発つと、浜名湖の東岸にある舞坂から船で浜名湖を渡り、対岸の新居に上陸する。

なお、③の原文は記述にやや乱れがある。例えば、浜松で宿泊して翌日十六日を迎えているが、充真院は十六日と明

記せずに文章を綴っている。「小出様：」以降の文章にも乱れがある。小出様に関する記述は意味が不明である。さらに、充真院は篠原に着いた記述の後に舞坂と天龍川を渡船通行したこと、およびその際の景色がよかったか否かは記憶が不確かであると記した。しかし、舞坂は浜松よりも西で浜名湖の東岸に位置し、これから舞坂から浜名湖を船で渡り新居に向かうのであり、浜名湖渡船の様子は実はこの後に具体的に記してある。さらに天竜川は浜松よりも東に位置するので、本来ならば見附と浜松の宿の間に記すべきであるが、追記するように配置している。とはいえ、記憶が不確かであることについて明記しているのは、充真院の執筆者としての良心からである。

## 二 三河国を行く

### ① 新居の渡しと関所

原文 荒井は伊豆様の御領分之由にて、役人衆出舟に乗移る時は上り段かけ舟に入、此舟は両方杉戸にして中は三畳もあらん、まく張、左右は杉戸と障子、次は男子之方計三人計と先様の御役人衆也、舟朱ぬり、ここは五十町の渡しの由、こき出ければ、広き泉水の様に思われ心も落附けるまま寂ふりもやうし、只氣しよく気色もよくと計、少し茶でものみ度成けれど、初ての事故用意もせず致方なき事といひしうち、舟は荒井なる岸に付、追々上りて女子之方は前に御関所あらため、末に私之駕籠とをすとの事、其内岸之方見居し所、今のり来る船は直に屋根を少し上へ上げて、柱ぬき杉戸もまくも船底に入、柱をぬきならへ屋根をふたにしてこき帰る、其手廻し誠よく早き事かんしむ、御関所之方にやらひ有て、御門より一人つつ通し、跡より私とをり候と、直に本陣にて疋田弥五郎と云、聞は此方か一に渡りしとの事、此所にては出入之本陣指つかひのよし、外の内乍不相変とて御酒・吸物・肴二、くわし・うなき出し、昼膳も済、此宿よりも色々出し、次向迄に十分に御酒たへ申候、白須賀小休、二タ川え宿りぬ、

## 現代語訳

これから向かう新居の関所は、当時、三河国吉田藩（譜代・七万石）松平（大河内）伊豆守信古の領内である。役人が出船に乗り移る時に梯子を掛けて船に乗りこむ。この船は両側に杉戸があり、私が招かれた船内の部屋は三畳くらいで、幕を上部から張りめぐらし左右に杉戸と障子が設けてある。部屋の側に控えるのは内藤家の御供の男性三人と松平家の役人たちである。船の外観は朱塗りである。

この新居の渡しは五十町―約五、四km―程の幅の渡しである。船で漕ぎ出すとまるで庭に作った広い池のようである。私の心は穏やかに落ち着くとともに、心が寂寥に満たされた。たいへんしみじみと景色が美しいので、景色を見ながらお茶を飲みたくなった。しかし、はじめての湖上渡船であるためお茶を飲む準備をしておらず、残念だけでも仕方がないと周りの者たちと言葉を交わしているうちに、船は対岸の新居に到着した。順番に上陸して、まず御付の女中たちが新居の関所で女改めを受け、その後に私が駕籠に乗って関所を通るといふ。私は順番が来るのを待っている間、先ほど上陸した岸の方を眺めていると、つい今しがた私たちが乗ってきた船はすぐに船の屋根を少し上にあげて、柱をはずし杉戸も幕も取り払い船底に収納し、柱を抜き並べて屋根にしていた板をその上に乗せて蓋にして、対岸に帰っていった。舟の片付けの手際がたいへん良く、さらに素早いことに感心した。

関所は敷地の周囲を矢来で囲っており、門を一人ずつ通行させて、最後に私が駕籠に乗って通過した。関所のすぐ近くに本陣があり、屋号を疋田弥五郎という。この宿で聞いたところ、私たち一行が本日、一番初めに関所を通過したという。新居の宿場では内藤家が参勤交代の際に利用している本陣の都合がつかなかったので、疋田家の本陣で昼食を摂り休憩をすることとなった。定宿ではないが予定通りの接待であり、御酒・吸物・肴二種・御菓子・鰻が昼食として供された。疋田の宿からも特別に色々な心遣いの品を出してくれ、私の御付の者たちにまでもたくさん御酒を振る舞ってくれた。その後、白須賀で小休憩をとり、二川で宿泊した。

**解説** 浜名湖の南東にある舞坂から新居に向かうには船で浜名湖を渡る。この渡しを新居の渡し、または今切の渡しと称す<sup>(18)</sup>。浜名湖は湖なのでたいへん穏やかで、その様子を充真院は庭園の泉水のようであると譬えた。静かなことに加えて、船から眺める景色の美しさに充真院はたいへん感じ入っている。「只気しよく気色もよくと計」と充真院は記しているが脱字があり、正しくは「只気しきよく気色もよくと計」である。景色について繰返し表現しているのは感嘆であり、言葉に尽しがたい程すばらしく充真院の心を打ったからである。

充真院は自分たちが乗船した船をよく観察している。船室の様子を把握し、さらに新居に上陸してから自分たちが乗ってきた船の船室を解体している様子をじっくりと見つめ、その手際の良さに感心しているのは、好奇心豊かな充真院らしさといえよう。

新居の関所は敷地に隣接して渡船場があった<sup>(19)</sup>。この特徴ある立地や関所が棚矢来で囲われていることなども充真院は的確に書き留めている。充真院は関所で女改めを免除されているので、御付の者が通行するのを待った。関所を通過してすぐに本陣疋田弥五郎に行き昼食を摂った<sup>(20)</sup>。当時から当地は鰻が名物なので<sup>(21)</sup>、充真院への昼食の一品として鰻が供されたのである。その後、白須賀を通過し遠江国をあとにして、いよいよ内藤家の先祖らの所縁の地である三河国に足を踏み入れた。この夜、充真院は二川の唯一の本陣である馬場彦十郎家に宿泊したのである<sup>(22)</sup>。

## ② 四月十七日 (十二日目) 心和む幼児との出会い

**原文** 四月十七日 朝くもる、昼後より雨、夕ふりに成こまり候、二夕川の本陣を立出、何事に有しか、例のいねふり、稲村・吉田二度やすみ、赤坂昼、夫より法蔵寺前小休、此宿に五ツ計成子供上下を着、向ひに出て、床にはれいし石に付たるか、沢山富士の大なる方之も有売物と見ゆる、何にかけん釜、代々家につたひ有とてみする、是はつは有釜、

代々一台到来せしか、持行にこまる故、心さし嬉しけれとこまり候に付、一・二ツ計もらわんと跡はかへしぬ、宿のかわゆらしき故、側えよひてくわし杯遣し、此節は諸家の御道中故、賑やかにてうれしからんと云は、いやしやと云は、其度々おとなしくなきとしかるる故の由、尤とわらひぬ、雨はますます降くるし、此辺にて神君様御手習を遊はし候寺有、直といへと雨ゆへ行す、

**現代語訳** 朝は曇りだったが、昼過ぎから雨が降り、夕方には雨脚が激しくなり進むのに困った。二川の本陣を出発してから、どうしたことか私はすっかり眠くなり駕籠の中で居眠りをして過ごした。小休憩を二回、稲村と吉田の宿でとった。赤坂で昼休みにして昼食を摂り、その後、法蔵寺前で小休憩をした。この宿では、宿の五歳ぐらいの男の子が袴を着て、私たちを迎えてくれた。宿の床の間には靈芝を石に沢山取り付けて大きな富士山を形作った飾り物があり、販売しているようであった。何に使う釜か不明だが代々この宿に伝わっている釜を見せてくれた。この釜にはつばがある。宿では代々、到来した奥方に釜を謹呈しているというが、これを持って旅をするには支障がある。宿の方の気持ちはいれしいけれど困るので、一つか二つだけいただくことにして他は辞退した。

先ほど出迎えてくれた宿の男の子がかわいらしいので、私の側に呼び寄せてお菓子などを与えた。最近、旅で宿を訪れる大名家などが多く宿場が賑やかなので、この男の子が喜んでしゃぐという。品が無いのでその度に「おとなしくしていなさい」と叱られてばかりいるという。それを聞いて皆で笑いあった。雨脚はますます激しく降りしきっている。この近くに神君様―徳川家康―が幼少期に手習いを学んだ寺がある。すぐ近くであるというが、雨が激しいので参詣はしなかった。

**解説** 四月十七日は天候に恵まれぬ一日であった。充真院は駕籠で移動中、ずっと居眠りをして過ごしたという。曇り空の下、さらに雨に降りこめられては街道沿いの景色は期待できず、充真院は疲労もたまっていたのであろう。法蔵

寺前の宿で休憩した折、心あたたまる出会いがあった。休憩に立ち寄った宿で、宿の五歳ぐらいの男の子が袴を身に着けて迎えに出てきたのである。小さな体に小さな袴を着て挨拶に出迎える様子が微笑ましく、かわいらしかった<sup>(23)</sup>。男の子を呼び寄せてお菓子を与えた際に、充真院は話しかけたりしたのであろう。ささやかな出会いとはいえ、子供好きな充真院は旅の疲れを一時忘れられたのではなからうか。

宿の近くに徳川家康が手習いをしたという所縁のある法蔵寺がある。法蔵寺は大宝元年（七〇一）に行基が開いた歴史の古い寺である<sup>(24)</sup>。徳川家康所縁の寺を是非とも訪れて参詣したかったのは、譜代大名井伊家に生まれ、譜代大名内藤家に嫁いだ充真院らしい思いである。寺は近いものの、雨のために断念せざるをえなかったのは、この時の雨脚が実に激しすぎたことを物語っている。

### ③ 岡崎西本陣中根甚太郎家とその娘

原文 藤川小休、此辺よりして雨にぬれつつ人多行通ふ故、ふしぎと思ひ、夫に家毎にとうろうを出し祭にても有様子故、何様の祭礼にても有哉と尋しに、岡崎の宿なれば十七日故、権現様御祭とて賑おふとの事、右の方に寺有て人参詣するやうす、我も参り度思しかと、強ふりにて供之者もこまる様子ゆへ、先本陣も近くあらん、着のうへにてと行過、此本陣は中根甚太郎とて昔は此家にはゆいしよ有とて、丁寧に取りあつかふ、此家の娘、八ツ計にて、茶菓子杯はこひ持来りて側に居故、其やうすを見れば、けしほうつにしてうしろの髪を長くのはし、其さきをかた過る迄、着物は袖ちいさく、帯はかたひきにしてたらしと下け居、此辺皆此様也、少しおち付しまま近ければ権現様へ参詣せんと思尋しかは、此辺には只御祭り計拝しに行は二・三里も有との、夫に雨故御あかりも軒下に付、夕よりは淋しきとの事故、致方なくてやみぬ、かの娘は私之側はなれず、めつた成事もなしかたくて、次へ遣はさはやと思へと、直に来りこまり、其内夕

せんにも成、此宿の面々よりくわし折・吸物・すすりふた・さし身、次えも同じ、草臥しままそこにして休、娘には手遊ひ遣す、皆髪を結ておりし所を見、宿の女共珍らしとて見に來り、夜はとふしていねると尋しよし、

**現代語訳** 藤川で小休憩をとった。この周りから、雨に濡れながらも多くの人が街道を行き交うので不思議に思った。

しかも、街道沿いの家ごとに灯笼を飾ってあり、祭りでもあるような様子である。私が「何の祭礼があるのですか」と尋ねたところ、ここは岡崎の宿場なので十七日は権現様―徳川家康―の御祭で賑わっていると教えてもらった。街道から向かって右側の方向に寺があり、人々が参詣のために行き交う姿が見えた。是非、私も参詣したいと思ったけれど、雨脚が激しいのでお供の者たちは困っているようである。まずはここから本日の宿である本陣が近いので、本陣に到着することにして通り過ぎた。この本陣は中根甚太郎といい、かつて内藤家と中根家は由緒があるので特別丁寧に対応してくれた。

この家の八歳ぐらいの娘が私に茶と菓子を運んできて、私の側に座っている。娘の姿を見ると、髪型は芥子坊主にして後頭部の髪を長く伸ばしており、その長さは肩を過ぎるぐらいである。着物は袖が小さく、帯は片方を引いてだらりと下げている。岡崎あたりの少女は皆このような髪型と着物であるという。休憩して落ち着いたので、徳川家康をお祀りしている寺が近ければ参詣したいと思った。しかし、本陣の付近は御祭だけであり、家康をお祀りしている寺はここから二・三里―八―一〇km―も距離があるという。それに雨が降っているので街道沿いの家々は軒下に灯笼を灯しているが、夕方でもあり寂しい感じがするので残念だが参詣はあきらめた。宿の娘が私の側から離れないので少しも寛ぐことができない。御付の者が控えている隣の部屋に娘を行かせても、すぐに私の所に戻ってくるので困ってしまった。

そのうち、夕食の時間になり、宿の人々から私に菓子折と吸物・硯蓋に盛り付けた口取り肴・刺身などが供された。次の間にいる御付の者たちにも私と同じ物が用意された。食事を終えてから、疲れ果てていたので早々に就寝した。な

お、この宿の娘に玩具を与えた。私たち一行の女中たちが就寝の前に髪を結っている様子に宿の女中たちが気づき、珍しがり見に集まってきて「夜は結った髪をどのようにして寝ているのでしょうか」と尋ねていた。

**解説** 充真院一行が岡崎に到着した四月十七日は、奇しくも徳川家康の命日であった。徳川家康が元和二年（一六一六）年四月十七日に死去して以来、毎年、岡崎の徳川家の菩提寺である大樹寺では御神忌法要、近隣の伊賀八幡宮では東照宮本祭が行われ、当地の人々は家康の遺徳を偲んだという<sup>(25)</sup>。したがって、街道沿いの家々では灯笼―神灯―をかかげていたのである。

岡崎で充真院が宿泊した宿は、西本陣の中根甚太郎家である<sup>(26)</sup>。内藤家と中根家との由緒とは、内藤家が徳川家康に従って関東に移動する以前、岡崎を拠点としていた頃にまで遡る。両家は共に武士であり、中根家は内藤家長の配下であった。しかも、家長の妹が中根家に嫁いでおり、かつて両家は親戚だったのである。この中根家は岡崎に留まり当地で本陣を営んだ。内藤家の当主は参勤交代の際に西本陣の中根家に宿泊していた。なお、充真院が訪れた当時、中根家は内藤家から三河国にある当家の複数の菩提寺に対する仲介を任されていた。

充真院と中根家の娘のふれあいは実に微笑ましい。娘は親に命じられたのであろう、充真院に茶と菓子を運んできたが、その後も充真院の側に座り続けて離れようとしなかった。充真院はこの娘にたちまち好かれたのである。隣の部屋に行くように促しても、すぐに充真院のところに戻ってきたことについて、充真院は困ったと記しているが、内心はかわいらしく、さらにいとおしく感じたのであろう、ゆえに持参していた玩具を娘にあげたのである<sup>(27)</sup>。

この宿に着く直前に法蔵寺前で休憩した宿で、宿の無邪気な男の子と楽しい出会いがあったが、岡崎の本陣でも子供との出会いによりほのぼのとしたひと時を過ごしたのである。充真院は子供たちのかわいらしい姿や振る舞いに心を癒されたことであろう。なお、岡崎で徳川家康をお祀りしている西本陣から二・三里の位置にある寺とは大樹寺のことで

ある(28)。

## ④ 四月十八日(十三日目) 誓願寺参詣

原文 四月十八日、小雨、昼後天、岡崎立出、矢作にかかれは、橋は損し船渡し、只跡先面影残り、中頃はくひ計也、ここの気色橋の損したるもやう取に成、流早く岸にすの多有ておもしろく見ゆ、舟渡し済て直に小休、座敷より今渡れる所よく見ゆる、矢作の長者と云昔の物語に有しか、今も古跡の有哉と尋ければ、今長者の跡寺に成て、此わきの義経の御尊を初有よし、さあらは行ておかまんとて、小休の所を立出行に、此寺は古ひけれと僧杯は二・三人も居て、まつ庵くらひの寺にて、正面に本尊有、浄るり姫と義経の尊、持し笛もかさり付て有、峰の薬師を初いろいろの尊有、画そうも出し拝し、色々の宝物も出し、縁起を云て、千躰地藏を額に付て有、是は戴者も有、又納る人も有由、余程数ふそくして額計有も有、さあらは道中安全の様に一ツうけ行んとおろしもらひ、外なる人もうけて、地藏尊ははりこにて三寸計、直に駕籠に入て行ぬ、其外御影御守等もうけ候、拝し終、門を出かこに又のりて例のいねふりおほへす、三州なる大浜といふ小休、ここはそはの名物とて、そは粉到来して立出んとするに、秀見参り、今膳立して何か出すやうす、知らず貌して居てもよからんか、又男の方へ知らせ候はん哉と申、いつれ何とかいわんといへるうちに、そはと吸物・口取の品いろいろ出し、一統へも出し、風味も随分よく、ここを出、池鯉鮒屋に着、本陣永田清兵衛、夫より前後小休、此所金物細工有て少々整、是より鳴児、有松しほり、小休之宿は鈴木与右衛門、いろいろしほりを、ここを立出、夕こくに宮泊り、本陣大塚与六郎、ここにてもしほり・金物類・小間物迄持来る整、あすは桑名渡しとて、其用意してふせりぬ、

## 現代語訳

四月十八日は午前中には小雨が降っていたが、昼過ぎに晴れた。岡崎の西本陣を出発して矢作川まで来た

ところ、矢作橋が壊れているため対岸には船で渡るようになっていた。橋の両側の袂に近い部分は残っているが、橋の中央は激しく破損して板が落ちて杭だけが残っていた。この景色と橋が壊れた様子を挿絵に描いた。川の流れが速く、川岸に洲が多くある様子を興味深く感じた。私たちは船渡しを終えてすぐに小休憩にした。

休憩した座敷から、つい先ほど私たちが船で渡った所がよく眺められる。私は「矢作の長者という昔話があるが、現在もその所縁の場所が残っていますか」と尋ねたところ、「長者の家があった場所は今は寺が建っており、寺の脇で源義経の御姿をお祀りしていることをはじめ、様々お祀りしてあります」という返答であった。「それならば是非とも参拝しましょう」と思い発ち、休憩地をあとにして寺に向った。

この寺は古いけれど僧などが二・三人いた。まず、庵ぐらゐの建物―十王堂―に入ると正面に本尊―阿弥陀如来像―が安置してあり、浄瑠璃姫や源義経の姿を象った木像や、所持品の笛も飾り付けてあった。その他に峰の薬師をはじめ、様々な仏像がお祀りしてある。それ以外に描かれた品なども見せてくれたので拜んだ。色々な寺宝も取り出して見せてくださった。寺の縁起も聞かせてくれ、所縁の千躰地藏のお姿の刷物が額に掲げて奉納されているのを目にした。この刷物を寺から授与していただき持ち帰る者もいれば、一方、寺に奉納する人もいるという。人々から厚く信仰を寄せられているようで刷物の数が不足しており、額だけを奉納したものもある。それならば私も道中を安全に過ごせるよう入手したく思い、額を下してもらい刷物の一つ授与していただいた。外で待っていた御付の者も刷物を手させていただいた。その他に三寸―約一〇cm―程の張子製の地藏尊があり、これも入手して私の駕籠に入れて持っていくことにした。その他に御影御守も授与していただいた。参拝を終えて寺の門を出てから駕籠に乗り込むと、また眠たくなり居眠りをした。

その後、三河国の大浜の茶屋で小休憩をした。この地は蕎麦が名物である。休憩した茶屋から蕎麦粉を入手して出発

しようとしていたら、女中の秀が茶屋の内部の様子を見てきて、「今、台所で私たちのために何か食事の用意をしています。知らないふりをして出発してしまってもよいでしょうか。または、御付の男性の家臣に知らせましょうか」と言う。

私が「いずれどうするか御付の男性の家臣に伝えましょう」と返答しているうちに、茶屋から食事の用意が出来たと伝えられた。蕎麦と吸物、口取り肴を色々と供してくれ、御付の者たちにも用意してくれていた。これらの味はたいへん美味しかった。ここを出発して昼に池鯉鮒に着き、本陣の永田清兵衛で昼休みにした。本陣に着く前と本陣を出発した後には小休憩をしたことを補足しておく。この地は金物細工が名物なので少し入手した。その後、通過した鳴児―鳴海―と有松は木綿の絞り染め―有松絞り―が名産である。小休憩した宿は鈴木与右衛門で、ここでも様々な絞りの品を入手した。ここを発ち夕方に宮に到着し、本陣の大塚与六郎に宿泊した。この本陣でも絞りの品と金物細工や小間物などを用意してもらい入手した。明日は桑名の渡しから船で移動するので、その用意をして就寝した。

**解説** 矢作橋は安政二年（一八五五）七月二十九日の大洪水により流失していたが、幕府は財政難を理由に復旧せず、その後、明治四年（一八七一）に仮橋が架設されるまで船渡しであった<sup>(29)</sup>。充真院は当地を通行した時、壊れたまま放置されている状態の橋を目にしたのである。矢作川は男川・豊川と共に当地の三大河川である。矢作川は大河ゆえ、かつての矢作橋は長さが二〇八間―三七八、五m―、橋杭は七〇柱もあり、東海の地における第一の長橋として著名で、橋の高欄には頭巾金物―柱の上部の切り口を覆うように被せる金物―が施された立派な造りであった<sup>(30)</sup>。充真院は矢作橋が大破している状態を観察し、その姿を川岸に洲が多くできている様子と共に、向かいの山を背景にした挿絵を描いた。充真院にとって興味ある景色だったゆえである。

渡船の後に休憩地で話題にした矢作長者とは兼高長者のことである。兼高長者の娘である浄瑠璃姫と奥州に向かう源義経の悲恋の伝説は有名である<sup>(31)</sup>。兼高長者の屋敷跡に建立された寺について充真院は具体的な名称を記載していな

いが、誓願寺十王堂のことである<sup>(32)</sup>。誓願寺十王堂は充真院一行が進む東海道沿いの右手にあり立ち寄り易い立地である。誓願寺は長禄三年（九九七）に恵心僧都が建立した由緒ある寺で、兼高長者が悲恋に苦しみ菅生川に入水して死去した浄瑠璃姫を当寺に埋葬して十王堂を再建した。かつてより充真院が知っていた物語の現地で、源義経と浄瑠璃姫の木像や笛―名笛薄墨―など所縁の品々を自らの目で見て拝めたことは、格別の体験であり感慨を催したことであろう。池鯉鮒で充真院らが昼食を摂った本陣の永田清兵衛家は、当宿唯一の本陣である<sup>(33)</sup>。充真院は屋号を永田清兵衛と記している。実は文久元年（一八六一）に当家の十三代清兵衛が本陣の辞退を申し出て、翌二年（一八六二）に名古屋の寺島清一郎が本陣の株を買い永田清一郎と称し、屋号は従来通りで本陣を営んでいた<sup>(34)</sup>。その後、充真院は大浜<sup>(35)</sup>の蕎麦や池鯉鮒の金物細工、鳴海や鳴海から一里―四km―程にある間の宿の有松の名産である細い木綿に紅や藍を用いて絞り染めにした鳴海絞り・有松絞りなど<sup>(36)</sup>、東海道の名物を食べたり名産品を入手して、旅ならではの楽しみを体験した。なお、池鯉鮒までは三河国だが、鳴海から尾張国である。

## 註

(1) 「五十三次ねむりの合の手」は明治大学博物館が所蔵する内藤政道氏寄贈書の一書で、架号(二) 充真院(繁子) 関係(一) 一二である。

(2) 掛川における太田家からの厚遇については、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院著「五十三次ねむりの合の手」小考」(『城西人文研究』第三四巻、令和元年)の136―138頁で原文に現代語訳と解説を施して紹介した。

(3) 伊能秀明・小倉葉子・永田由香利・桑原理恵「現代訳『東海道五十三次ねむりの合の手』のおかしみ―幕末期大名家夫人の気ままな旅日記の世界―」(『図書の譜 明治大学図書館紀要』第十六号、平成二十四年)では、見付・浜松間については一

- 四六頁、岡崎の西本陣については一四七〜八頁に現代語訳が紹介されている。
- (4) 金谷の本陣については大熊喜邦『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』（日本資料刊行会、昭和五十四年）の六三頁による。
- (5) 小夜の中山については『掛川市誌』（掛川市誌編纂委員会編、昭和四十三年）の九四七頁、『掛川市史』上卷（掛川市史編纂委員会編、平成九年）の七六七〜八頁による。
- (6) 小夜の中山に多数の伝説が存在することについては『掛川市誌』の九七一〜一〇〇〇頁による。
- (7) 飴の餅については『掛川市誌』の一六二頁、『掛川市史』上卷の七七〇〜二頁、『掛川市史』中卷（掛川市史編纂委員会編、昭和五十九年）の六一三〜七頁による。
- (8) 小泉屋とは茶屋の小泉屋忠左衛門家のことである。これについては『掛川市誌』の一二一九〜二一頁による。さらに、小泉屋の見取図が『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の二九八頁に「小夜中山建場 小泉忠六郎宅」として掲載されており、この図から床の間付きの上段間が設置された立派な茶屋であることがわかる。
- (9) 岡畏三郎・網野善彦・白石つとむ『広重 東海道五十三次』保永堂版初摺集成（小学館、平成九年）27 「東海道五拾三次之内・掛川 秋葉山遠望」による。
- (10) 『掛川町の民俗―掛川市―』静岡県史民俗調査報告書第十二集（静岡県教育委員会文化課県史編さん室、平成二年）の一三三頁による。
- (11) 松井茂兵衛一元や大泉市右衛門明影については、拙著『幕末大名夫人の知的好奇心―日向国延岡藩内藤充真院―』（岩田書院、平成二十八年）の一三一頁による。
- (12) 太田資始や資美については『掛川市誌』の一三七頁、『掛川市史』中卷の六五六〜七頁による。

- (13) 掛川の本陣については『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六四頁、『掛川市誌』の四三二頁、一八六頁、一二一六〜八頁、『掛川市史』中巻の四八二〜三頁、四八六〜九一頁による。
- (14) 澤野弥三左衛門家の本陣の見取図は『掛川市誌』の一二一七頁、『掛川市史』中巻の四八九頁に掲載されている。
- (15) 見附の本陣については『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六四頁、『磐田市史』通史編中巻 近世（磐田市史編さん委員会、平成三年）の五六八頁、『東海道遠州見付宿』磐田市誌シリーズ第二冊（磐田市誌編纂委員会、昭和四十九年）の一六五頁による。
- (16) 『女水滸伝』の一場面を思い出したことについては拙著『幕末大名夫人の知的好奇心―日向国延岡藩内藤充真院―』の一九三頁でふれた。
- (17) 浜松の本陣については『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六四頁、『浜松市史』二（浜松市役所、昭和四十六年）の一九七〜八頁による。
- (18) 今切渡船については『新居町史』第一巻 通史編上（新居町史編さん委員会、平成元年）の四三七〜八頁、『浜松市史』二の一八五頁による。
- (19) 新居の関所は今切関所ともいう。この関所については『新居町史』第一巻 通史編上の五四四頁、『豊橋市史』第二巻（豊橋市史編纂委員会、昭和五〇年）の五二一〜三頁による。
- (20) 新居の本陣については『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六五頁、『新居町史』第一巻 通史編上の三九四〜七頁、『新居町史』第三巻 風土編（新居町史編さん委員会、昭和六十三年）の一八二〜七頁による。
- (21) 鰻については『新居町史』第三巻 風土編の四六二頁、五一七頁による。
- (22) 二川の本陣については『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六五頁、『愛知県史』通史編 4 近

- 世1（愛知県史編さん委員会、平成三十一年）の四〇〇頁、『豊橋市史』第二卷（豊橋市史編纂委員会、昭和五〇年）の五五三～五頁、『愛知県史』通史編5 近世2（愛知県史編さん委員会、平成三十一年）の二二九頁による。
- (23) この子供については拙著『幕末大名夫人の知的好奇心―日向国延岡藩内藤充真院―』の一六〇頁で紹介した。
- (24) 法蔵寺については『新訂 東海道名所図会』「中」（新訂日本名所図会集2 平成十三年、ペリかん社）の一〇頁、『新編 岡崎市史』総集編20（新編岡崎市史編纂委員会、平成五年）の三二六～七頁、『愛知県史』第二卷（吉川弘文館、昭和十三年）の八九七頁による。当時、この寺には徳川家の御宮があり、さらに徳川家康が手習いの硯水に用いた名泉の賀勝水があることとで著名であった。
- (25) 家康の命日、及びその法要や祭礼については、『新編 岡崎市史』近世3（新編岡崎市史編纂委員会、平成四年）の五七一～二頁による。
- (26) 岡崎の本陣については『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六六頁や柴田顯正編『岡崎市史』第参卷（岡崎市役所、昭和二年）の一七七頁、『新編 岡崎市史』近世3の六三四～七頁による。
- (27) 中根甚太郎家、及びその娘については拙著『幕末大名夫人の知的好奇心―日向国延岡藩内藤充真院―』の一六〇～二頁、拙著『幕末大名夫人の寺社参詣―日向国延岡藩内藤充真院・続―』（岩田書院、令和三年）の六五～七〇頁で明らかにした。
- (28) 充真院はこの文久三年の転居の旅では大樹寺を訪れることはなかったが、その後、二回目の転居の旅の過程で大樹寺を参詣した。それは、慶応元年（一八六五）五月二日であり、詳細については拙著『幕末大名夫人の寺社参詣―日向国延岡藩内藤充真院・続―』の七四～八七頁で明らかにした。
- (29) 矢作橋の破損については、『新編 岡崎市史』近世3の一六六頁、七四三～四頁による。
- (30) 矢作川と矢作橋については、『新訂 東海道名所図会』「中」の九五～一〇〇頁、『新編 岡崎市史』近世3の七四三～五頁、

七五二頁による。

(31) 浄瑠璃姫伝説については『新編 岡崎市史』近世3の五七七～八頁、『新訂 東海道名所図会』「中」の九五頁による。

(32) 誓願寺については『愛知県の地名』日本歴史地名大系第二三卷(平凡社、昭和五十六年)の八一～九頁による。

(33) 池鯉鮒の本陣については、『東海道宿駅と其の本陣の研究 附、中山道宿駅と其の本陣』の六六頁、『知立市史』上巻(知立

市史編纂委員会、昭和五十一年)の四〇二～三頁、四七五～六頁、『新編 知立市史』1 通史編 原始・古代・中世・近世

(知立市史編さん委員会、令和三年)の五六〇～一頁、『愛知県史』通史編4 近世1の四〇〇頁による。

(34) 本陣の運営者が変わったことについては、『知立市史』上巻の四九〇頁、『新編 知立市史』1 通史編 原始・古代・中世・

近世の五六三頁による。

(35) 大浜は東海道と大浜街道が交差する位置にある茶屋でたいへん賑わっていたという。大浜については『新編 知立市史』1

通史編 原始・古代・中世・近世の五六五頁や『新編 岡崎市史』近世3の六四三頁、『愛知県史』通史編5 近世2の二三

一頁による。

(36) 有松絞りにについては『愛知縣史』第四卷(吉川弘文館、昭和十五年)の六一～六頁、『愛知県史』通史編4 近世1の四六一～

二頁、『新訂 東海道名所図会』「中」の六一頁による。